

(公社) 日本鍼灸師会 全国大会 in 愛知大会レポート

講演 4 : 「医療面接の意義と、医学教育における医療面接教育の現状」

講 師 : 高橋 徳幸 先生 (名古屋大学大学院 医学系研究科 地域医療教育学寄附講座
特任助教、名古屋大学医学部附属病院 総合診療科)

報告者 : 菊池友和 (研修委員会)

本シンポジウムでは、高橋先生より医学教育における医療面接の意義と教育の現状についてご講演頂きました。医療面接は、患者の医学的な情報を収集して診断や治療を説明する手段となるだけでなく、患者の心理社会的背景を理解し、患者に対して共感を示しながら患者を全人的に支援する場となるとのこと。

さらに、医療面接は患者-術者コミュニケーションの基本となり、医学部において、医療面接は、文部科学省が定める医学教育モデル・コア・カリキュラムの中で必須の学修項目と位置づけられている。医療面接学修の習熟度は、医学科 4 年生に対する臨床実習前「共用試験」(全国统一試験)のなかで、客観的臨床能力試験(Objective... Structured... Clinical... Examination;... OSCE, ... オスキー)という模擬環境での試験によって問われる。

一方、鍼灸師養成校では 1997 年に OSCE の導入意識が高まり卒前の臨床能力に関する教育と評価を目的として、定着を図るよう今日まで研鑽されているが、現状、鍼灸養成学校では、さまざまな理由から国家試験の出題範囲に重点を置かれることも否めず、コミュニケーション技法や医療面接技法などに十分時間が取れていないことなども理由に挙げられる。

現時点で、鍼灸師も医療や介護と連携を行い、鍼灸臨床や研究、教育の場で、実践されている先生もいると思うが、本シンポジウムを聴講し、医療面接の意義を再認識し、実現可能な医療面接教育を本会で再検討する良い機会になった。